I-6

リーダーズ・ダイジェスト論争にみる坪井善勝の建築観

Yoshikatsu Tsuboi's view of architecture through the debates on Reader's Digest Building, Tokyo

○奥田優人 [1]，　大川三雄 [2]

*Yuto Okuda[1], Mitsuo Ohkawa[2]

Abstract: Yoshikatsu Tsuboi is a structural engineer well known for a partner of Kenzo Tange. Their collaboration made many architecture that lead Japanese modernism to the next step or more further. This paper is written to clear Tsuboi's view of architecture through the debates on Reader's Digest Building in Tokyo.

１．坪井善勝の従来の評価

坪井善勝（1907-1990）は建築家とともに協働し，多くの作品を残した構造家である．特に丹下健三との協働が目立つ．丹下研究室の大谷幸夫は，「坪井さんと丹下さんが議論をしている様子を見ているとどちらが建築家でどちらが構造家だかわからない．丹下さんがしゃべるのはおもに構造計画的な提案や着想であり，坪井さんがしゃべるのはプランニングや造形的な提案なのだ」と語っている．このことから坪井は建築家と対等な立場で設計に関わっていたことが明らかである．山本学治は雑誌『建築』1961 年 1 月号において，坪井を「建築家との協働」「面的 RC の追求」の 2 つの側面で評価している．

本稿ではリーダーズ・ダイジェスト論争での坪井と建設省建築研究所の竹山謙三郎の発言から，両者の「協働」「構造と表現」についての考えを比較検討する．

２．リーダーズ・ダイジェスト論争の概要

戦後の復興期である 1951 年，現在のパレスサイドビルの建つ場所にリーダーズ・ダイジェスト東京支社（以下リーダイ東京支社とする）が建設される．この建築は建築家 Antonin Raymond と構造家 Paul Weidlinger の協働により実現した．矩形の平面をもつ 2 階建てのオフィス棟と 1 階建ての食堂棟の 2 つを L 字型の回廊で結んだものからなる．オフィス棟は張間方向中央に RC の柱，両端に梁を支える 2 本の鋼管柱を配するハイブリッド構造である．トイレや階段などは中央の柱の周りに配され，張間方向の壁はほとんどない．眺めを遮蔽しないという要求どおり，外に開いた開放的な平面をもつ．

リーダーズ・ダイジェスト論争（以下リーダイ論

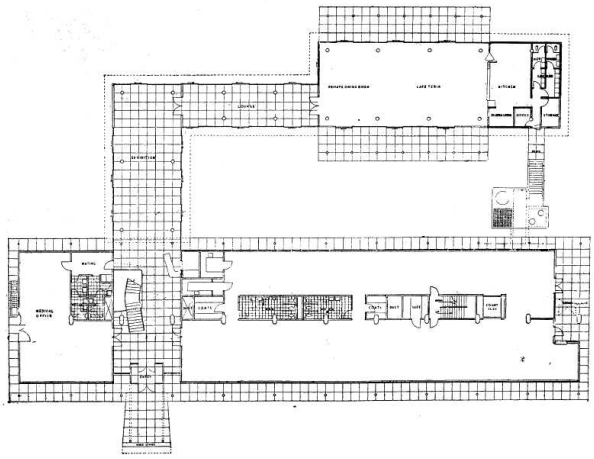

図 1: リーダーズダイジェスト東京支社 1 階平面図， 建築雑誌，Vol.66，No.780，1951

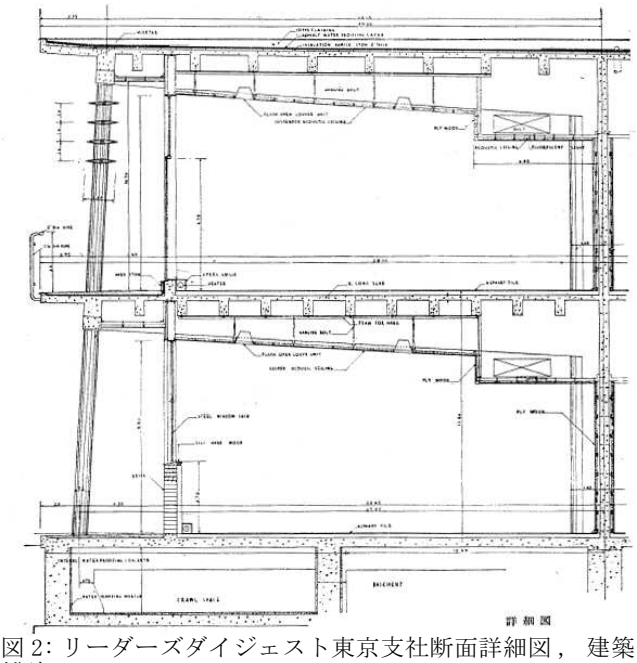

図 2: リーダーズダイジェスト東京支社断面詳細図， 建築雑誌，Vol.66，No.780，1951

１：日大理工・院（前）・建築，Graduate School of Science and Technology, Nihon University

２：日大理工・教員・建築，Prof, College of Science and Technology, Nihon University

争とする）は，このような計画に対して建築家および構造家が『建築雑誌』上で展開させた議論である．ストレートな構造表現やガラス張りであることが注目を集めたが，大きな争点となったのはリーダイ東京支社の耐震性である．

『建築雑誌』1951 年 11 月号に記載された坪井善勝と竹山謙三郎の批判文に対し，Weidlinger が応え，それに対して再び坪井と竹山が返答する形で論争は終わる．

３．竹山謙三郎との比較

・「協働」について

建築家と構造家の協働によって実現したリーダイ東京支社であるが，竹山の批判文は協働について触れていない．一方で坪井は批判文の中で，Weidlinger の″Tomorrow's Structural Theory″，Architectural Forum, August 1949 への感想として，「structural Engineer の立場から建築生産の近代化を目指して構造家とデザイナーとの協力を主張する氏の抱負を読みとることが出来た」と述べており，リーダイ東京支社を協働の実現作品として受け止めていることがわかる．さらに「日本の現状よりは両者分業及び共感の性格がはつきりしていて，米国の設計組織を如実に示した点に特徴を見る」と指摘する．また，リーダイ東京支社の構造形式について「一般性」の有無で話を進めている．この「一般性」とは建築家がリーダイ東京支社のような構造形式を応用することができるかどうかというものである．「本構造がデザイナーの求める一つの方向を示すか示さないかは一般構造設計者にとつても重要な問題」であると説明する．「構造設計の真の目的はデザイナの要求を極度に充すことであることは云うまでもない」とし，建築家へ歩み寄ろうとする坪井に対し，竹山は建築家を「建築家は自分の趣味を無理押ししてはならない」と強く突き放す．

ここではあくまで構造家を中心とした目線での批判を展開した竹山と，建築家との協働を第一に考える坪井の，2 つの構造家像がみえた．

・「構造と表現」について

坪井は「リーダーズ，ダイジエストは構造設計が極めて端的に表現された建築であ」ると理解している．竹山も同様の理解をしているが，「構造的合理性はデザインの合理性とは切離せないものである」と発言する坪井とは異なり，構造と表現が直接的に結びつくデザインに対し苦言を呈している．「若い建築家というか，建築ジャーナリストといつた方が良いか，その方々は兎角 Cantilever がお好きである．この建物のように 1 本柱から突き出て居れば尚更で，″躍動する構造″となり，″明快な構造″となる．柱が 2 本並んでその間に四角な窓がある通常の構造が何故明快ではないのだらうか．これ以上″明快″であり，″構造体そのままの意匠″であるものはないと思うのだが.」

構造即表現の建築に対する見解の違いがみられた．竹山は従来あるような構造を中心に考えているが，坪井は構造と表現の関係を素直に受けとめている．

４．まとめ

リーダイ論争は，2 人の構造家の違いを明るみにしたものであった．戦後初期の国際水準の建築であったリーダイ東京支社は，建築家と構造家の協働のモデルケースを示したものであり，ここに坪井善勝が関わっていたことは後の功績を考えても重要であると考えられる．またリーダイ論争以降，坪井の空間・構造に関する言及が増えていくこと，またシェル構造への研究が始まることから，坪井にとってリーダイ論争は，空間・構造へ彼を惹きつけた出来事であったといえる．

参考文献

[1] 坪井善勝：「リーダーズダイジエスト社構造設計の批判」，建築雑誌，Vol.66，No.780，pp.1-2，1951

[2] 竹山謙三郎：「揺すつて見たい建物」，建築雑誌，Vol.66，No.780，pp.3-5，1951

[3]Antonin Raymond:「リーダーズ　ダイジェスト東京支社社屋」，建築雑誌，Vol.66，No.780，pp.17-24，1951

[4]Paul Weidlinger，野生司義章訳：「竹山謙三郎、坪井善勝両氏の論文に答えて」，建築雑誌，Vol.67，No.783，pp.1-3，1952

[5] 坪井善勝：「ワイドリンガー氏の反駁論への感想」，建築雑誌，Vol.67，No.786，pp.1-2，1952

[6] 竹山謙三郎：「ワイドリンガー氏の駁論を讀む」，建築雑誌，Vol.67，No.786，pp.3-4，1952

[7] 新井昌徳他：「アントニン・レーモンドの建築における構造と表現―リーダーズ・ダイジェスト東京支社を中心として―」，日本建築学会近畿支部研究報告集．計画系（41），pp.937-940，2001

[8] 阿部和夫，高橋知之：「建築家と構造家の協働を中心にみたアントニン・レーモンドの事跡―「近代建築」における欧米の影響と相対性／アントニン・レーモンド研究・3―」，学術講演梗概集．F-2，建築歴史・意匠 1997，pp.73-74，1997